

広島大学 グローバルインターンシッププログラム  
**NEWSLETTER**

海外インターンシッププログラム(G.ecboプログラム)  
 —10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

第12号 Vol.5 No.2

2013年 3月

目次:

次のステージへ	1
2011年度インターンシップアンケート	2-4
2012年度活動報告	5
進路・就職状況	6
写真展のお知らせ	7
2012年度夏期派遣学生帰国レポート	8-11
PPT研修チーム紹介	12

**G.ecboプログラム、次のステージへ！！**

G.ecbo教育プログラムが大学院GPに採択されてから、事業が終了し全学教育プログラム化を見た今日まで五年が経過致しました。この間、色々な出来事を乗り越えながらG.ecboプログラムの全学への周知の努力を重ね、教育プログラムとしての認知度は高まったと勝手に思い込んでいました。しかしながら、学生から「海外インターンシップに興味あるが、どうすれば良いのか分からない」という声が聞こえてくることも事実であり、広報が未だ十分ではないことを思い知りました。近年、日本の若者が内向き志向であると言われて久しいのですが、事G.ecboプログラムに関しては、そのような感想を持ったことはありません。先の学生の声からも推察されるように、「外に興味が無いわけではなく、ただどのようにすればよいのか分からない」というのが正しい理解ではないかと感じます。その意味で嘗ての学生のような貪欲さ、積極性が希薄になっているのかも知れませんが、逆に言えば、こちらから手を差し伸べれば、海外での活動を経験したいと思っている学生は潜在しているのではないかと思います。従って、そのような学生にG.ecboプログラムのような教育プログラムの存在を知らせてあげるのはプログラムに携わる我々の責務であります。これまで、色々な面で、機会を利用して宣伝に努めてきましたが、今一つ学生には届いていないかも知れないということで、この3月から4月にかけて、学生が良く利用するであろう学生プラザで海外インターンシップ活動の写真展を企画しました。海外で同世代の学生が嬉々として作業する姿を見て、共感を持ってもらうことと、G.ecboの広報を目的としています。

これまでG.ecbo教育プログラムの制度整備に邁進してきましたが、6年目を迎えるに当たり、次のステップとして、海外インターンシップそのものが広島大学の目玉教育と言われるように、普及活動はもちろんですが、教育の質を高める新しい仕組みを作ることが今後我々に求められる責務であると考えます。事務局一同、次のステージを目指して新たな挑戦を開始する所存ですので、今後益々の皆様のご協力を願ってやみません。



G.ecbo運営委員長  
 肥後靖 教授

グローバルインターンシッププログラム運営委員長 肥後 靖

◆ お知らせ ◆

インターンシップ写真展

<場所>

学生プラザ・らせん階段  
 1～3F

<展示期間>

3/25(月)～4/12(金)

※詳細は7ページへ！



G.ecbo海外インターンシッププログラムとは？

グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して、既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適應できる研究者の輩出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

## インターンシップアンケート報告（2011年度派遣学生アンケート）

2011年度はG.ecbo海外インターンシッププログラムより夏期11名・冬期5名の計16名が派遣されました。多くの学生が、研究を進めていく上での計画性・自己管理能力の重要性を感じたようです。アンケート結果をまとめました。

### ◆2011年度 学生派遣先

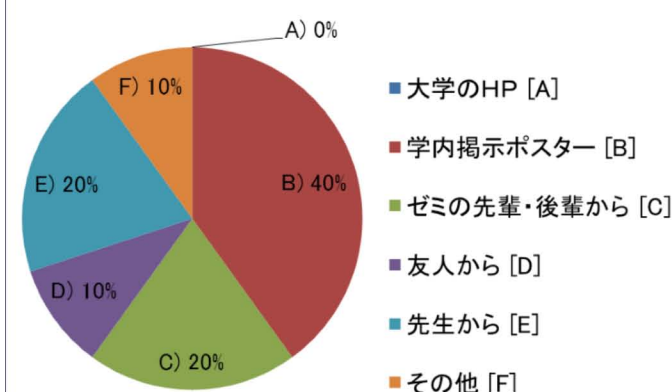
グラミン銀行、グラミンシャクティ、グラミンシッカ、ロシア科学省ウラル支所、UNICEF、パデコ、バンドン市、JICAマカッサル、HIPECネパール、アルメック、マレーシア工科大学、ケニヤッタ大学



### Q.本プログラム応募の一番の決め手は？

- 企業体験ができるだけでなく、自信の研究に係わる活動を行うことができるという点
- 渡航費や滞在費の補助
- 研究室の先輩からの体験談。『こんな機会は二度とない、絶対応募すべき』と強くすすめられた。
- 途上国経験が少なかったので、機会を得ることができた可能性があったため。
- 入学以来、研究の調査地をどこにするかを考えていた。そこで教育開発に関するインターンができるという事実を知り、研究対象国になりえると感じたため。

G.ecboプログラムを何で知ったか？



### Q.参加するに当たって期待していたことは？

- 現地の企業・機関で実際に行われている活動に触れられること。派遣国(途上国)の現状の理解。
- 国際協力の分野で働くことを体験すること。
- 現地で、仕事を通じてコネクションの強化。インターンとして仕事に熱心に従事する代わりに自身の研究についてのアドバイスや基本的なデータの収集というトレードオフの関係。
- 日系企業の海外支社での業務やそこで働く社員の普段の生活の理解。

### Q.参加のメリット・デメリットは？

#### 《メリット》

- 就職のネタになる。
- 研究に係わる成果のみならず、自身の将来を考える上で参考になることが多くあった。
- 自分で、計画から実行まで、一連の作業を行う機会を得られる。進路選択に生かせる。
- このプログラムのおかげで海外での経験を踏めることが広大な大きなメリットである。
- 研究を将来的に行うに当たって、現地の先生・学生と知り合いになり、情報交換を行える点。
- (教員)現地に長期滞在し、現地研究者とまとまった調査が出来ること。
- (教員)指導教員から良い意味で一定の距離を置くことができ、研究遂行能力や自己管理能力等の育成が進められること。
- (教員)事前研究等によって、プレゼンテーション能力等が育成できること。



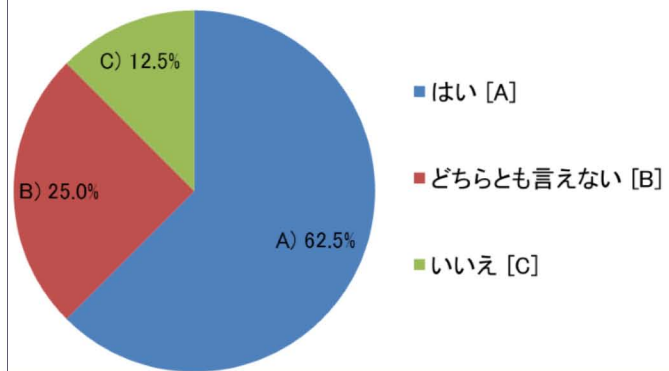
#### 《デメリット》

- 研修期間によっては講義を少し休む
- 手続きや書類が多いことがあげられるかもしれないが、経済的な支援を受けている身として必要なことで、それも一つの勉強となったと思う。

## Q.研修・研究テーマが妥当でなかった場合、どのような工夫・改善が必要と思いますか？

- 事前のやりとりをもっと詳細にすべき。
- 指導教員へは、業務や活動内容の詳細の提供をしてもらいたい。
- The host institute should confirm whether or not intern can do his/her proposal more early in order to change proposal/ or change host institute (if possible).
- 必要書類等の指示。担当者と指導教員の不一致の解消。

研修・研究のテーマのマッチング



## Q.インターンシップ後、伸びたと思われる能力・伸びなかったと思われる能力は？

### 《伸びた能力》

- 知らないことを聞く積極性
- 現地での自発的に行動する力や、課題を発見していこうとする能力が伸びたと思う。
- 海外での比較的長期の生活に関して、経験という点で力がついたと思う。何より途上国での長期の滞在中にいろんな人と関わることで新たに知ったこと、国際協力の仕事について少しばかりであっても知識がついたことが最も良かった。
- (教員)インターンシップでの成功が自信となり、研究にますます集中するようになりました。
- (教員)卒業後の実務従事への意欲が高まったようです。

### 《伸びなかった能力》

- コミュニケーション能力。語彙という面もそうだが、自分にない文章構成力が欠如している点も一つだと思う。(英語の書物を読んだり、映画を見たりでも、より英語に触れそれを使う必要がある)

## Q.インターンシップ遂行上、不足していると痛感した能力は？

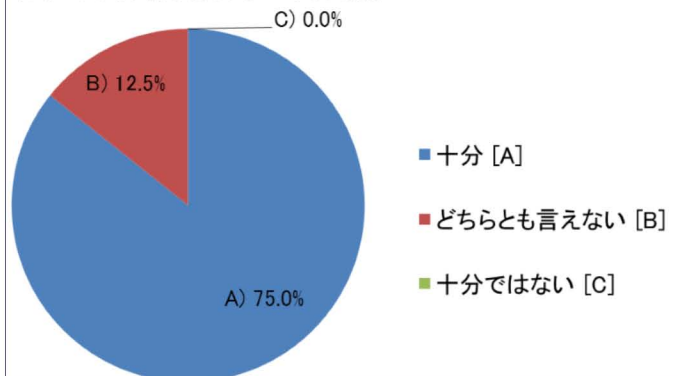
- インターン本来の目的を遂行するのに必死で、インターン期間中の休日などをしっかり楽しめなかった。そういう余裕を持てればもっと良かったと感じた。
- 現場経験がないため、現場における能力が不足している。



## Q.不足していた能力を克服するためには？

- 語学の学習(英語、現地語も少々)
- オンオフの切り替え
- 個人で能力向上に努めることが必要
- 対処法があるとしたら、自分の中で対処すべきことだと思ふ。
- 現地で働いている人の意見を聞くといいかもしれない。
- (教員)学生が行うべきこととして、語学力の改善。やはり実務の最初の最初で問われることである。
- (教員)大学側として、英語能力充実のための授業の提供

インターンシップ終了後のフォローアップ活動



## Q.(指導教員)G.ecboプログラムに所属学生を参加させてよかった？

- 業務従事の具体的なイメージが喚起されたことにより、将来のキャリア構築への意欲が高まったことは大きな成果。
- 当該学生に強く依存する。比較的自由に放任するインターンシップがあう学生もいれば、スケジュールや労務管理を徹底するケースがあう学生もいる。

## － プログラムの全学化第Ⅱフェーズが開始されるにあたって －

G.ecboプログラムは、平成19－21年度文部科学省大学院GPを通じて推進拠点を形成後、1年の準備を経て、事務局の大学本部移管と各研究科教員で構成される運営委員会が発足し、平成23年4月に全学教育プログラムとして新たな船出をしました。あれから2年、新生運営委員会の下、この4月よりプログラムの全学化第2フェーズが始まります。

大学院GP採択からこれまでを振り返るとG.ecboプログラムの成果として大きく2つ挙げられるように思います。1つはインターンシップを含む海外派遣の実施に関する大学内のプラットフォーム構築への寄与です。海外での活動に対するリスク管理の標準化や、英語ディベートとケースメソッドを採用した「能力開発特論」や「インターンシップ」の大学院共通科目化、プログラム全体を通じて実施する英語プレゼン研修の整備がなされました。

もう1つは、大学院で期待される教育レベルを踏まえて、海外インターンシップに専門性や研究的側面での意味を付加し、プログラムの中に位置づけたことであります。これによって、単なる就労体験という範疇を超え、現地での活動に学術的かつ実践的な広がりも持たせることが可能になりました。

一方でこの2年間に様々な課題も見えてきました。まず、プログラムの全学化に伴い専門分野や学生のニーズが多様化した結果、派遣先の準備や研修・研究内容のマッチングが複雑かつ困難になってきました。プログラム内容面での質や妥当性の向上に向け、参加学生の指導教員や所属研究科、関連分野の担当教員とより一層の協力や連携が望まれます。

次にプログラムの持続可能性の向上が挙げられます。教育プログラムである以上参加する学生の教育効果が第一義であり、その達成のため様々な工夫がこらされていますが、高い専門性を持つインターンシップを標榜する以上、貴重な機会を提供していただいている受入機関への還元も考えていく必要があります。これは、GP終了時に挙げられた課題の一つではありますが、依然として関係する個々の先生方に依っているのが現状です。また、大学側も、学生募集等、対外的な観点からのメリットだけでなく、国際化という文脈から、法「人」としての基盤を強化していくうえで重要となる社会関係資本(ソーシャルキャピタル)を形成する戦略的なツールの1つとして捉えていく時期にあります。このようにプログラムの持続可能性を確保していくためには、ステークホルダーである学生、受入機関、大学が「三方一両得」となるような工夫をしていく必要があるように思います。

以上のとおり、まだまだ克服していかなければならない課題は山積しておりますが、関係者のご支援の下、より有意義なプログラムとなるよう邁進してまいります。

「G.ecboは世界一の海外インターンシッププログラムになる！！」

G.ecboプログラム事務局研究員 中村 聡

## インターン経験を活かす！ For Future Carrier!



大矢 祥平(広島大学大学院国際協力研究科2013年3月修了)

- 総合商社・総合職 内定 (派遣先:株式会社アルメック/ベトナム・ハノイ)
- TA: 能力開発特論(2012年度前期)Developing Designing Ability

G.ecboインターンシップには派遣前後でいろいろな研修が用意されています。これは他の一般的なインターンシップには無い特徴であり、G.ecboインターンシップの大きな魅力だと思います。その研修の一環として、私がTAとして参加した能力開発特論があります。この講義では英語で留学生とディベートやプレゼンテーションをしなければなりません。加えて、今年度からは模擬講義をグループで行いました。

この講義にTAとして参加して良かったことが2つあります。まず、参加学生の成長を身近で感じられたことです。当初は英語での発表や話合いに躊躇していた学生が講義の回数を重ねる度に積極的に発言をするようになっていきました。これに加えて、自分自身の成長です。TAとして講義前の打ち合わせに同席させてもらい、それぞれの講義での狙いや先生たちの考えや意図を聞くことができ、受講生として参加した時には理解が及ばなかった部分まで理解することができました。

4月からは商社で勤務します。国内外の企業と交渉する場面も多くあると聞いています。G.ecboインターンシップ、TAでの経験を生かして日々の業務に励みたいと思います。



# 2012年度活動報告



- 4月1日 2012年度派遣学生の公募開始
- 4月4日 G.ecbo Day: プログラム募集説明会
- 4月13日 合同留学体験報告会 (発表者: 田中健太さん)
- 4月23日 海外インターンシップ募集締切り
- 4月25日 遡上教育型インターンシップ帰国報告会
- 4月27日, 5月1日 2012年度派遣選考面接
- 5月14日, 16日 英語プレゼンテーションガイダンス
- 5月17日 留学WEEK報告会 (発表者: 大矢祥平さん)
- 5月23日-25日 第1回英語プレゼンテーション研修
- 5月31日, 6月7日, 8月3日 2011年度冬期派遣学生帰国報告会
- 6月20日, 22日, 25日 第2回英語プレゼンテーション研修
- 6月26日 リスク管理セミナー(全学対象)
- 7月11日 リスク管理セミナースペシャルセッション
- 7月18日, 20日, 23日 第3回英語プレゼンテーション研修
- 7月23日 教養科目「国際協力を考える」発表  
(発表者: 板谷憲志さん)
- 7月27日 能力開発特論: オープンディベート
- 9月12日 G.ecboプログラム運営委員会



G.ecbo Day



G.ecbo Day (フリートーク)



リスク管理セミナー(全学)

- 10月4日 G.ecbo追加派遣募集ガイダンス  
(発表者: 下山知久さん)
- 10月31日 合同留学体験報告会 (発表者: 大木健司さん)
- 11月12日, 14日 遡上教育型インターンシップ派遣選考面接
- 11月13日, 14日 2012年度夏期派遣学生帰国報告会
- 12月12日 冬期派遣英語プレゼンテーションガイダンス
- 12月21日 リスク管理セミナー(全学対象)
- 1月9日, 16日 冬期派遣英語プレゼンテーション研修
- 2月13日 広島大学後援会・広島大学校友会研究助成金  
等成果報告会 (発表者: 末竹誠さん)
- 3月5日 G.ecboプログラム運営委員会



G.ecbo追加派遣募集ガイダンス



リスク管理スペシャルセッション



広島大学後援会・校友会助成金等  
成果報告会



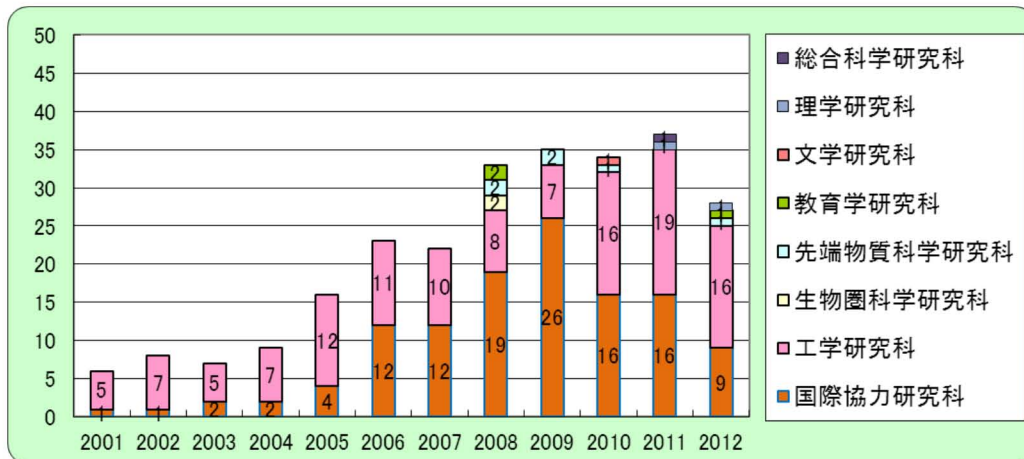
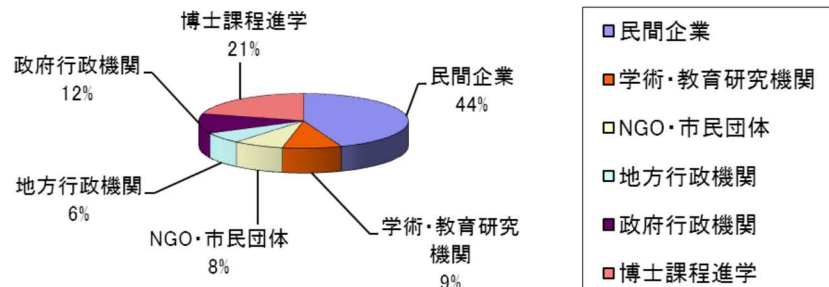
帰国報告会

## プログラム成果: 進路・就職状況

厳しい就職活動を乗り越えてきたG.ecbo修了生から、G.ecboインターシップの経験は一般的な就労体験以上の海外でのインターシップということもあり、多くの企業の方から大きな関心を持たれるという感想をいただいています。

教育プログラムとして始めて以来、これまで100名を越える修了生を送り出してきました。民間企業への就職はもちろん、行政機関やNGOへの就職、博士課程後期への進学を経て研究者の道を進むG.ecbo生も数多く輩出してきました。

G.ecboプログラム課程修了後の進路先  
(2005-2011派遣学生)



### インターシップ関連の修士論文

本プログラム参加者のうち以下の6名が、インターシップの成果のもとに修士論文をまとめました。

2012.9修了	浅田 義教	Feasibility Study On Technology Cooperation With Mutual Benefits Between Bangladesh And Japan: Integration Of R&D And BOP Market For New Solar Technology
2012.9修了	植田 涉	Research on environmental awareness among Cambodian university students. -Analysis of the Environmental Appraisal Inventory [EAI] -
2013.3修了	板谷 憲志	平和構築活動としての参加型開発の可能性 若者に焦点を当てた東ティモールの「青年議会」を事例として
2013.3修了	延川 裕樹	ケニア共和国において教員の診断評価が生徒の掛け算の技能に与える影響 -ナクル市の事例から-
2013.3修了	檜木 陽子	大学生の障がい者に対する態度の比較 -ケニヤッタ大学と広島大学の事例から-
2013.3修了	末竹 誠	貧困削減におけるICTの役割 -ネパールの丘陵地帯を事例にして-

# G.ecbo 写真展



G.ecboプログラム初の取り組みとして、海外インターンシップ活動の写真展を企画しました。2011年度より2年間、G.ecbo事前英語プレゼンテーションのTAとして活躍してくれたAhmad Sajjadさん(国際協力研究科修士課程前期学生)が、5年分の写真から展示作品を選んでくれました。3月25日(月)から4月12日(金)、学生プラザ・らせん階段の1階-3階で写真の展示しています。



Ahmad Sajjad (広島大学大学院国際協力研究科2013年3月修了)

I am delighted to be part of an extremely enthusiastic and energetic G.ecbo team to expand tremendous opportunities of domestic and international internship programs for students and researchers at Hiroshima University. Being a Teaching Assistant for the G.ecbo Program, I have had honor of conducting and leading the remarkable event of the G.ecbo Photo Exhibition at Hiroshima University. The core objectives of this virtual image photo exhibition are to publicize and promote the G.ecbo's motive of extended opportunities of global internship for potential interns in the future.

The exhibition is widely based on former interns' captured photographs of diverse experiences of research and fieldwork studies in different corners of the world. Therefore, we have decided to share those glorious and magnificent experiences of research and fieldwork activities of former interns through their splendid snapshots during their internships with prospective interns at Hiroshima University.

The exhibition is not only aimed at portraying the beauty and exquisiteness through the benevolent objectives of interns' eyes and camera lenses. It will also be a way of raising awareness for prospective interns to presume cross cultural diversities and unaccustomed ethics and norms by offering those glimpses through the eyes of several former G.ecbo interns of different educational backgrounds. The exhibition symbolizes and exhibits the explicit feelings and emotions of interns during their internship activities abroad. Also, it has critical importance to forthcoming interns by denoting the former interns' remarkable research experiences from a variety of their intellectual capacity and extensive array of cross-cultural understandings through their selective snapshots.

## 2012年度遡上教育型インターンシップ派遣プログラム

冬期はG.ecboプログラム遡上教育型インターンシップより、3名の学生が派遣されました。遡上教育型インターンシップとは、博士課程後期学生を対象とした、インターンシップ等経験者を再度研修地域・機関等へ派遣するプログラムです。随時、派遣生を募集していますので、興味のある方は事務局までお問い合わせください。

遡上教員インターンシップは二種類に分けられます。

- (1) 研究プロポーザル型(応募型): 研究スキル向上を目指す方
- (2) フォローアップ型(公募型): 教育・研究指導スキル向上を目指す方



氏名 Name	所属研究科	学年	派遣機関
鈴木 佑太郎	先端物質科学研究科	D1	グリフィス大学(オーストラリア)
高阪 将人	国際協力研究科	D1	ザンビア大学(ザンビア)
Mrinila Singh	国際協力研究科	D1	FORWARD(ネパール)

## 2012年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

金藤 冬樹 Fuyuki KANETO (理学研究科)

Host	ロシア科学アカデミー・ウラル支所 (ロシア)
Period	2012年7月29日-8月14日
Objectives	ロシア中部、および南部ウラル地方の鉱床地帯の調査



調査地域周辺に宿泊施設がないため、カチカナル岩体近辺にベースキャンプを設営しての調査となった。4日間のベースキャンプでロシアの方々と生活を共にしたことで、すぐに打ち解けることができ、去年の調査では感じとれなかった相手の人柄や考え方を深く知ることができたと同時に、我々の調査のための様々な準備や細やかな気遣いに感謝し、今後はそれに研究で答えられるよう努力していかなければならないと思った。インターンシップ前半の調査を通して、事前の学習では把握できなかった岩体の産状を大まかに理解することができ、今後の研究に必要となる岩石試料を十分に採取することができた。さらにロシアの地質学者との議論によって本鉱床の成因について、彼らの知見を得ることができ、どのような研究がどこまで進んでいるのかを把握することで今後重点的に取り組むべき点を明確にすることができた。



後半の調査では様々なタイプのVMS鉱床の岩石試料を採取することができた。今後の研究で各鉱床の違いを詳細に記載し、それぞれの成因について考察することができると考える。また、一つの地域にここまで多様な鉱床が分布している地域は世界的にもほとんど存在しないため、このような短期間の調査でも非常に興味深い結果が得られることが期待される。

今回のインターンシップでの経験は、実際に現地に足を運び、自分の目で鉱床を見て、現地の研究者の方々に関わらなければ決して得られなかった、かけがえのないものである。また昨年と比較し、自分の語学力や専門能力の成長を自覚できたことは、将来資源探査・開発に携わることを目標としている自分にとって大きな自信となった。本インターンシップで得たこれらの経験は、これからの研究や就職の際に必ず役立つものだと思う。

上原 亜由美 Ayumi UEHARA (国際協力研究科)

Host	株式会社アルメック (ベトナム)
Period	2012年8月6日-9月4日
Objectives	・ハノイ市におけるニュータウンの開発状況を把握する ・インタビュー調査をもとに、今後のニュータウン開発のあり方についての知見を得る



今回のハノイでの滞在を通して、ハノイ市のニュータウンが比較的高所得者層向けになっている一方で、かたや学校へ通うことのできず路上でものを売る子供たちも目の当たりにした。学校と教師数の絶対的不足により、授業は午前と午後の二部制となっているという。貧困の再生産を食い止めるためにも、公共インフラ・公共サービスの充実による格差の是正が急務であると感じた。



研修内容は、会社の抱えている案件のお手伝いをしながら働く経験ができるという普通のインターンシップとは異なる。むしろその逆で、自分のプロジェクトに会社の方々を巻き込むというプロセスの中で、業務体験ができるという感じである。テーマを設定し、調査計画を立て、進め方や実行可能性について話し合いを開いていただいたり、事務的な手配をローカルスタッフとやり取りしたりと、実務的な経験ができた。ただし、会社の方々の仕事を増やしてしまうことになるので、そのあたりの配慮は十分に必要である。

自らテーマを設定し、アプローチ法を考えて調査を行い、結果を分析してまとめるという一連の作業は、私にとって初めての経験でした。約一ヶ月間のベトナムでの滞在期間中、研究が行えたことはもちろんですが、自分の長所や短所がはっきりとわかり、自分を見つめなおすいい機会になりました。みなさんの協力なしにこのような経験は不可能でした。厚く御礼申し上げます。



# 2012年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

尾場 友和 Tomokazu OBA (教育学研究科)

Host	フロリダ州立大学大学院教育学研究科 (アメリカ合衆国)
Period	2012年8月17日-9月18日
Objectives	米国におけるPreparing Future FacultyとしてのTA研修と授業観察。将来大学教員を目指す大学院生の職業的発達の支援システムとその実際を学ぶ。



本研修は、主に2つの要素から構成されている。第1に大学の全研究科のティーチング・アシスタント(TA)を対象に行われているPIE (Program for Instructional Excellence)プログラムへ参加し、教育を体験することである。第2に教員養成課程の入門科目であるEDF1001において、TAの担当者会議、授業準備、授業実践、成績評価などを観察することである。

これらの研修に関連して、地元の高等教育機関であるTallahassee Community Collegeにおける初任者教員の研修プログラムや学生への学習支援システムに関して視察する機会を得た。私が強く関心を抱いたことは、大学教員が研究者ではなく教育者の役割に徹していたことである。ほとんどの時間を授業に費やし、研究の時間を確保することが非常に難しい状況である。だが、コミュニティーカレッジでは、学生に基礎・基本をどれだけ丁寧に教えるかを教員の力として重要視しており、大学として教員の研究能力にはあまり関心が寄せられていなかった。こうした教育重視の教員を求める実態は、それを歓迎する教員も少なくなくコミュニティーカレッジにはそうした教員が大半を占めているということがわかった。



日本のほとんどの学部教育では、コースワークを通じて自分の関心・適正を見つけ出し、卒業論文・卒業研究を作成することで学部教育の総仕上げを行ってきたように思われる。一方、アメリカではコースワークで行われる授業の理解が教育の中心に据えられ、授業でどんな知識を伝えるかが重要であるかのように思われた。どちらのやり方にも優劣があり、一概には善し悪しの判断はくだせないが、大学での授業構成や指導方針の構築に、非常に示唆に富んだ資料を入手できたと言えよう。

中島 浩美 Hiromi NAKASHIMA (国際協力研究科)

Host	フロリダ州立大学大学院教育学研究科 (アメリカ合衆国)
Period	2012年8月16日-9月20日
Objectives	①アメリカのTAシステムについて学ぶ ②アメリカの高等教育機関について理解を深める ③アメリカの国際化の現状についての理解を深める



今回の研修を通して、TAシステムやチュータリングサービスを始めとするアメリカの高等教育機関の教育の特徴について理解を深めることができ、またフロリダ州立大学とタラハシー・コミュニティー・カレッジ(TCC)における国際化に関する取り組みについて学ぶことができた。

研修前、日本にいる時に「学生(TA)が授業を教える教育の質は大丈夫なのか」などネガティブな意見を聞くこともあった。FSUを5週間訪問してみて、そこには考え方や文化の違いがあり、例えばpeer supportという概念がFSUでは強くみられたように思う。TA制度もチューターサービスもこの考え方の影響を受けている。一方でTCCでは、TAを利用せず教員が教えていることと、learning supportも専門の職員が行っている点を利点としてアピールされていた。現地ですべてにオリエンテーションや学生やスタッフとの交流を通してTAを行っている学生の背景も様々で、特に理系には外国人留学生のTAが多いなど、新しい発見があった。



今回の研修を通して自分の経験と知識を安易に一般化しないこと、新しい情報を確認し続けることの重要性とアメリカの(同じ州内でも)高等教育機関の多様性を再認識することができた。新たに興味を持ったトピック(エスノグラフィック・スタディー)を利用した調査結果を基にした大学サービス改革や短大の4年制化などがあるので、それらを含め引き続きアメリカの高等教育について研究していきたい。

# 2012年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

西田 孝史 Takashi NISHIDA (国際協力研究科)

Host	ICLEI-Southeast Asia (フィリピン)
Period	2012年8月5日－10月6日
Objectives	・フィリピンの水資源の現状を学び、国際協力を根ざす上での基本的な礎とする。 ・水に対する意識調査を行い、自身の研究材料とする。



今回私がお世話になったのは、フィリピンのマニラに事務局を持つ、ICLEI-Southeast Asiaであり、地方レベルからの累積的な環境保護活動を推進している。私はScience City of Munozという、安全な飲料水が十分に得られない地域における地下水のマネジメントに関する事業に携わらせていただいた。

調査地には事前調査、本調査の2回に分けて行った。事前調査では表面的な情報を大まかにつかみ、本調査で特に焦点を当てるべきことを炙り出す作業となった。この事前調査は非常に有効に働き、ICLEIに戻ってきて計画の見直しとともに、需要サイドへの質問票の作り直しに多いに役立った。私自身への課題として、料金設定の効率化に焦点を当てることにした。本調査では、システム自体がさらに効率的に機能するために、必要であることを提言することに時間を割いた。最終レポートでは、プログラムの背景から実施に至った経緯、運営体制、その効果、また同様のプログラムを他の地域で実施した場合に必要な物的資本、社会的要素など、様々な要素を絡めて幅広い視点からプレゼンテーションを行った。

インターンシップで学んだことは、flexibilityの重要性である。あまり綿密な計画を立てた場合、何かあった際にドミノ式にすべてが水泡になる可能性がある。洪水であったり、Munozでの仕事に対する考えなり、引き金となるのはそこら中に転がっていたが、引き金を引かないようにするのは当然のことである。だが、いざそのドミノが倒れ始めた際に、どこで食い止めることができるか。ここに己の課題を感じた。インターンシップとしては完璧とは言わずとも、多少なりともICLEIの期待に応える事が出来た点は、自信になった。特に、評価を読み返した時の if he intends to do so, he will fit in well with an international development organization. という一言は、生涯忘れられないものとなるだろう。自分に現在必要なスキルを改めて考えさせられ、また自信として持って良いもの、国際協力とは何か、日本人とは何か。あらゆる角度から様々な事を気付くことが出来た今回のインターンは、将来のキャリア形成において重要な一歩となったと感じる。



大木 健司 Kenji OKI (国際協力研究科)

Host	Alternative Energy Promotion Center (ネパール)
Period	2012年8月26日－9月29日
Objectives	SWPS (Solar Water Pumping System) が導入された村で、どのような便益が生じたかという調査。また導入されていない地域でのSWPSに対するWTP (Willing To Pay) 調査の敢行。



ネパールの一部地域には水道も電気もない村がある。そのような村では、村民は長くて二時間ほどかけ水を汲みに行くという現状があった。しかしNGO、JICA、AEPCの資金援助もあり、太陽光を動力源として水源から山まで水を運んでくるSolar Water Pumping System (SWPS) が導入された事例がある。これにより村民たちは時間の短縮を可能とした。



以上のような状況から、1. 余剰時間の使い方・近況、2. 水質調査、3. 導入時期の違う他の村との比較、4. 非導入村におけるWTP調査を研究テーマに設定した。

今回の研究を通して、SWPSが導入された地域で197世帯、家族数で848人の情報を採取できた。SWPSが非導入の地域においては100世帯、家族数で470人にWTPに関する調査を実行した。収入面に関しても両村で増加が見られ、Keshavtarでは4万5000Rs.、Maidiでは7万Rs.の増加が見られた。今後は収入の増加と、その他収集したデータとの関連性をみる予定である。

## 2012年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

### 下山 知久 Tomohisa SHIMOYAMA (国際協力研究科)

Host	West Java Environmental Protection Agency (インドネシア)
Period	2012年9月3日－9月29日
Objectives	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Getting topography, bathymetry and initial displacement data for tsunami simulation</li> <li>• Tsunami simulation on the southern West Java province coastal line</li> <li>• Proposal in order to improve the Tsunami Early Warning System</li> <li>• Creating hazard map on the specified area</li> </ul>



The initial purposes were in the above box, though I decided to concentrate the proposals in order to improve the Tsunami Early Warning System in Indonesia, consulting with my supervisor in my office. They were significantly interested in Japanese Tsunami Early Warning System. Tsunami struck to the southern part of West Java province in 2006, causing heavy damage, more than 700 people fatalities, despite relative low magnitude of the earthquake. In terms of disaster prevention, it was pointed out the importance of setting up tsunami early warning system in the Southern West Java province. And also in 2006 earthquake struck to the southern part of West Java Province without tsunami. This area frequently has damage from earthquake and tsunami these days. Therefore that is emergency task which West Java province has residence enrich knowledge in regards to specially earthquake and tsunami mitigation and disaster through education system. They required me to introduce not only Japanese Tsunami Early Warning System and but also Japanese education system in order to enrich knowledge in regard to disaster mitigation and prevention.

It is no doubt that internship promotes us to get motivation for master thesis or working. In my case, my host institution is one of local government, and 99.9% are from Indonesia, so it is good opportunity to reconsider I am Japanese and which places are difference between Japan and Indonesia. If you are confusing, you should try it. Internship was worth of spending my time.

### 末竹 誠 Makoto SUETAKE (国際協力研究科)

Host	FORWARD (ネパール)
Period	2012年8月21日－10月26日
Objectives	実際に発展途上国の農村地域で調査をすることで、貧困削減におけるICT(Information and Communication)の現状と効果を明らかにする。



現地にて感じたことは、開発といっても人々にとってそれほど難しい技術を要求されているわけではなく、また人々が納得して取り組んでいるということである。これはまさに参加型開発にとって一番重要なことであり、このためには人々に、“これまででは栄養に偏りがあるのでこういった作物を育てると健康にいい”というような人々への知識の付与と、“本当に必要なものは何か”を考えてもらい、それをあくまでも支援するということが大切であると感じた。こうした取り組みがプロジェクトを成功させるだけでなく、プロジェクトが終わってからも、人々が継続していけることにつながると感じた。視察の際には必ずこれは成し遂げなくてはならないというものがないため、最も主体性が求められる。この点積極的に質問し、情報を得ることができよかったが、現象ばかりに注目してしまったのももう少し現地の人々がどういう想いでプロジェクトに臨んでいるかなど感情にも踏み込んで聞くとより深みのある情報収集になったと思われる。



今回のインターンシップは私にとって初めての一人での海外であり、初めての現地調査であったため、不安な面が多くあったがFORWARDをはじめ多くの方にサポートして頂き、充実した時間を過ごすことができた。リサーチを順調に遂行できたこと、プロジェクトエリアで開発の現状を実感したこと、農村で暮らして途上国の暮らしをより知ったことなど全てが私にとって貴重な経験となった。この経験をもとに貧困削減に貢献できるようこれからも力を注いでいく。

## 2013年度G.ecbo海外インターンシッププログラム TAの紹介 /Introducing G.ecbo Internship Program TA Team

G.ecboプログラムでは、派遣学生の英語コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力の向上を目的として、PPT研修を派遣前に計3回行っています。また必須科目として能力開発特論の履修を義務付けています。事前事後研修を行うことでインターンシップ内容の充実化を図っています。

G.ecbo program offer to interns the presentation training to improve their communication skill and presentation skill before their departure. Also, the program requires to take a cause "Developing Designing Ability".



**Assistant Prof. Lee Hyo-Jin**

*Coordinator for PPT Presentation sessions*

When I was Ph.D. student in Hiroshima University, I had a chance to attend G.ecbo program. It was a valuable experience for my professional development. I hope that you also take a chance to attend G.ecbo program. For the participants, our all members will definitely support to improve your communication and presentation skills.

### PPT presentation / 英語プレゼンテーション



**Yuka YAMAUCHI**  
(山内優佳)  
教育学研究科  
博士課程後期



**Mrinila SINGH**  
(ミリニラシン)  
国際協力研究科  
博士課程後期

ほか数名の学生さん  
にお手伝いしていた  
だく予定です。  
よろしくお願いま  
す。



### 編集後記

活動予定 2013年度前期  
<4月-10月>

- G.ecbo Day (4月)
- インターンシップ写真展(4月)
- 合同留学体験報告会(4月)
- 派遣学生募集締切(4月下旬)
- 選考・面接(5月上旬)
- 留学WEEK報告会(5月)
- 2012年度冬期派遣学生帰国報告会  
(5月中旬-下旬)
- 派遣学生決定者向けガイダンス  
(5月中旬)
- 事前研修開始(6月)
- リスク管理セミナー(6月下旬)
- 夏期インターンシップ派遣(8~10月)
- 派遣先教員訪問
- ニューズレターVol.6 no.1発行

G.ecboインターンシップが全学化され5年という節目を迎えました。そこで、これまでインターンシップに参加してきた学生達が撮影してきた写真を集め、展示会を行っています。2年間TAとして活躍してくれたSajjad さんが、学生の視点で選んだステキな写真達ばかりです。写真を通して先輩たちの活動に触れることで、インターンシップをより身近に感じてもらえるのではないかと期待しています。ぜひ見に来てください。



10年後の自分を探そう  
世界と出会うインターンシップ



Explore your future through Global Internship.  
Join the G.ecbo program!!



広島大学 教育・国際室  
G.ecboプログラム事務局(学生プラザ3F)  
電話 082(424)4551, 4581, 6950  
Email: gecbo@hiroshima-u.ac.jp

ホームページもぜひご覧下さい。  
<http://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo/index.html>

